

(1)

BULLETIN OF JAPAN BOOK PUBLISHERS ASSOCIATION

ISSN 0913-3631

No. 70

1992年5月特集号

書協

国際出版連合第24回

ニューデリー大会報告特集号

日本書籍出版協会会報

社団法人 日本書籍出版協会
東京都新宿区袋町6番地
電話 03(3268)1301代表
Fax. 03(3268)1196
編集発行人 五味俊和

(題字 布川角左衛門氏)

大会開会式。左からナイリールPA
会長、マルホトラ・インド出版協会
会長、シャルマ副大統領。



国際出版連合第二十四回大会は、インド・ニューデリーのホテル・タジパレスにおいて各国の出版人約八百名の参加のもとに、一月二十七日から五日間にわたって開催された。日本からは四十二名(同伴者を含む)から成る代表团が参加した。

国際出版連合

第二十四回ニューデリー大会

「障壁の打破——一つの世界のための出版」を

メインテーマに

本大会では、
「障壁の打破
——一つの世界
のための出版」

アジアの出版開発の必要性と

K分科会（議長）の報告

派遣団長・服部理事長報告

第二十四回IPAニューデリー大会は、予期以上の成果をあげて閉幕した。まずは何よりのことであった。一九七六年の京都大会以来十六年ぶりにアジアで開かれる二度目の大会であるから、わが国の出版界としてもその成功を希うところ切なるものがあった。

日本からも六十名を目標に参加を募ったが、インド国内の政情不安が伝えられて当初から申込みは思うように伸びず気を揉んだ。しかし最終的には四十二名の代表団を組んで大会に参加し、国際交流の役目を果たし得たことは同慶の至りである。

国民性や習慣の違いもあって、運

をメイン・テーマとして十二の分科会で世界で抱える種々の問題について討議が行われ、後載するいくつかの決議・勧告を採択した。

三月六日五時半より日本出版クラブ会館で「帰国報告の集い」が開催され、服部理事長以下、スピーカーなど、関係者から大会参加報告が行われ、出席者の間ではニューデリー大会の印象、これからの国際出版問題など、交流・懇談が行われた。

1992年(平成4年)5月1日

書協 (特 集 号)

(2)

営の手順にいささかの感想をもつこともないではなかったが、ともあれ四十三カ国、約八百名の参加を得たこの大会の成功は、IPA当局はもとより主催国インドの出版関係者、諸団体の長期にわたる準備のご苦労とご努力のたまものであった。

若い出版人の活躍と

植木氏の基調報告

一月二十七日の開会式は、マルホトラ大会会長、IPAナイリー会長の挨拶に続き、来賓として招かれたシャルマ・インド副大統領、ソアレ・ポルトガル大統領らが祝辞を述べ、ニューデリー大会のテーマ「障壁の打破——一つの世界のための出版」の意義を強調して出版人の活躍に期待を表明した。

大会はAからJまで十二の分科会にわかれてパネルディスカッションに入る。日本から松本陽一、下中弘宇喜多義敬、金原優、岡田吉弘の各氏が、それぞれのセッションでスピーチを行った。残念ながらスケジュールの関係で、私は五名の方々すべての講演を聞くことはできなかったが、わが国出版界の時代を担う若い人たちが世界の檯舞台で堂々とその

役を果たされた様子は、誠に心強い限りであった。

最終日の基調講演は、前文化庁長官・東京国立近代美術館長植木浩氏のご登壇であった。「日本の文化の発展と出版」と題したその内容は聴講者の大きな反響を呼び好評を博した。ご多忙の中を、押してご出席願った経緯があるだけに日本代表団の私たちも大いに喜びであった。

続くKセッション「アジアの出版」

は、私が議長をつとめた。スピーカーは、中国、フィリピン、韓国、ドイツ、アメリカと、インドから二名、

合わせて七名であった。準備の段階でIPA常任理事会では、欧米からのスピーカーを増やすよう希望されたが、折角のアジアでの大会なので、なるべくアジア地域の代表に発言の機会を与えたいと主張して受け入れられこの顔ぶれになった。結果的にもこれは正しい判断であった。

Kセッションにおける

各国報告者

七名の報告者からは、それぞれの国の出版事情、あるいはアジアを場とする出版交流について熱心なスピーチが続いたが、最初の発言者、中国代表は、この大会にグライ・ラマ師が招かれていることに反撥、冒頭強い抗議の意志を表して一瞬会場内に緊張が走った。私は議長として、この大会はいかなる政治的立場もとらないことを宣して大方の諒承を求め、事なきを得るといひと幕があった。

それはさておき、Kセッションにおける各氏の報告からポイントを紹介しておく。

イ・ジヤン氏（中国）——中国の出版開発の進展は国際共同出版が大きな役割を果たし、開放政策の促進

が海外交流を更に確実なものにしていく。

ナリンドラ・クマール氏（インド）——インドは世界有数の多言語出版国。科学、技術書の出版も大きく伸びて既に世界出版市場の有力な供給国となっている。

カーリーナ・ボラスコ氏（フィリピン）——革命後の社会的、政治的变化の中で書き手も出版社も新たな刺激を受け、最近ではフィリピン語による出版も拡大して潜在需要が開発されている。ただ、政府が輸入紙の関税率を高く設定しているため、購入価格は通関時の二倍以上になり、出版社を苦しめている。

イ・キ・ウン氏（韓国）——ソウル郊外に巨大な出版複合都市の建設計画を決めた。完成すれば韓国出版界の歴史的転換点となるだろう。

ピーター・ガットマン氏（ドイツ）——共同出版はそれぞれの地域の状況や必要性に合致するものでなければならず、信頼関係に基づく人的つながりが必要。

チャールズ・エリス氏（米国）——日本のような成熟国以外では、市場の成長と制限や障害の増大がからんで複雑な様相を呈している。



K分科会議長挨拶を行う服部理事長

(3)

書協 (特 集 号)

1992年(平成4年)5月1日

氏(インド)ーインドやアジアの文学の翻訳促進には不断の努力が必要。それは欧米言語だけでなく、アジアの諸言語間についても同様である。

十四の決議案を 全会一致で採択

こうして大会はすべての討議を終え、前に述べたように特別ゲストのダライ・ラマ師を迎えた閉会式は、全参加者が残らず集まったかと思えるほどの盛況の中で、著作権、読者憲章、出版物の非課税、自主流通、出版の自由など十四の決議案を全会一致で採択して幕を閉じた。

これらの決議は、どれをとってもわれわれ出版人にとって極めて重要なテーマ、今後の活動の中でいかに具体化していくかは私たちに課せられた大きな課題であり、決してスロイガンに終わらせてはならないものと考えている。

大会期間中は会議運営への協力に追われて会場のホテル・タジパレスに籠もったまま、デリーの街なかへ出る機会とほとんどなかったが、大会運営委の配慮で最終日前日の三十日、アーグラへの日帰り旅行をさせてもらった。生憎の雨に加えて

異常低温、デリーから片道二百キロ、往復十時間のバス旅行にはいささか閉口したが、さすがインド観光のハイルイト、アーグラ城、タージマハルの壮観には脱帽した。

そして二月一日、代表団のうち二十数名のネパール視察グループへ私は加わった。大きな任務を終えて安堵感を皆さんと快く分かちあひながら、ヒマラヤの白い神々を訪ねるひとときの旅は素晴らしいものであった。多くを記すゆとりもないが、概ね好天に恵まれたカトマンズ、ポカラの四日間は、私たちの旅の終わりに一層の充実感を与えてくれたのである。



閉会式でのダライ・ラマ師(中央)

国際出版連合第二十四回大会

出席者

青木信一(日経事業出版)	萩原実(徳間書店)	荒井修(徳間書店)	今東成人(東方出版)	植木浩(東京国立近代美術館)	森武志(タトル・モリ・エージェンシー)	宇喜多義敬(小学館)	加藤康雄(小学館)	松本陽一(小学館)	吉野達治(春陽堂書店)	和田欣之介(春陽堂書店)	鈴木耕治(三省堂)	前田完治(三修社)	生田栄子(サイマル出版会)	村松増美(サイマル出版会)	田村勝夫(サイマル出版会)	島田康夫(講談社)	乾源哉(講談社)	服部敏幸(佼成出版社)	平原伸次郎(佼成出版社)	小酒井貞一郎(研究社出版)	長祥隆(技報堂出版)	戸部虎夫(きんざい)	岡田吉弘(海文堂出版)	金原優(医学書院)
--------------	-----------	-----------	------------	----------------	---------------------	------------	-----------	-----------	-------------	--------------	-----------	-----------	---------------	---------------	---------------	-----------	----------	-------------	--------------	---------------	------------	------------	-------------	-----------



1月27日 ホテル・タジパレスでの結団式・懇親パーティの様様

秋山康政(日経事業出版)
大島正義(日本ビクター)
成瀬恭(原書房)
下中弘(平凡社)
芳賀章内(雄山閣出版)
五味俊和(書協・専務理事)
大貫健(書協事務局)

〔同時通訳者〕
桜田方子 酒井伊津子

〔同伴者〕

岡田美沙 戸部光栄
戸部敏明 田村雅子
前田ミツ 鈴木正枝
和田春子 下中菜穂子
以上四十二名、団長服部理事長。

1992年(平成4年)5月1日

書協(特集号)

(4)

K分科会で講演する植木氏



ご承知の通り、国際出版連合第二十回大会が東京、京都で開催されたのは、今から十六年前の一九七六年五月であった。このたび第二十四回大会が再びアジアにおいて、しかも世界有数の出版国であるインドで開催されたことは、アジアの一員としてこの上ない喜びである。

◇ ◇ ◇

分科会 K 基調講演録

アジアにおける文化と出版の発展

日本の経験

植木 浩氏(前文化庁長官・現東京国立近代美術館館長)

一月三十一日に行われた分科会K(服部理事長が議長を務める)で日本から植木浩氏(前文化庁長官・現東京国立近代美術館館長)が「アジアにおける文化と出版の発展—日本の経験—」との演題で基調講演を行ったが、会場からそのスピーチと内容に大きな反響を呼び、大好評を博した。講演は英語で行われたため日本語同時通訳による翻訳を事務局で整理し、植木氏ご本人の目を経て、以下に全文掲載する。

日本の近代化と出版

日本の歴史を振り返ってみると、十九世紀の後半における近代化の過程において、識字や教育の普及が、大変重要な役割を果たしてきたことはよく知られているところである。

しかし私は、それとともに出版が日本の近代化の促進に非常に重要な触媒としての役割を果たしてきたことにも注目しなければならないと思っています。

明治維新を迎え、日本が諸外国に門戸を開いたのは一八六八年のことであるが、日本で出版が盛んに行われるようになり、京都や大阪、江戸

など大都市を中心に出版物が急激に増加するようになったのは、それより前のまだ徳川将軍が政権を支配していた江戸時代の十七世紀半ば頃からである。それ以前は、書物は貴族や僧侶などの知識階級がその主な対象であり、一般庶民の生活からは程遠いものであったが、次第に町人文化が栄えるようになり、書物は庶民にも開放され、庶民文学が盛んになってきた。十七世紀末の書籍目録によると、そこに記載されている刊行物は七千二百余点にのぼり、目録以外の出版物を含めると一万点近くまでにのぼると思われる、当時出版された本の総部数は百万部を下らないと推定されている。

好色一代男と大衆文学

この頃すでに、町人出身の一人の大変なベストセラー小説作家が現れている。それは一六八二年に「好色一代男」を書いた井原西鶴である。仏教や儒教の道徳思想に基づく勧善懲悪の教訓的な本が多かった中で、西鶴ははじめて現実主義的立場から、愛欲や金銭への執着に満ちた町人の風俗を赤裸々に描いて大評判になったのである。彼の代表作「好色一代男」はヨノスケといういわば日本版のカサノバの物語である。彼は、版元から新しい小説六巻の執筆を依頼され、多額の前金を借りたが、それで遊里に遊んでいるうちに約束を果たさぬまま死んでしまったという伝説もある。

十八世紀前半の出版業者は京都、大阪、江戸で三百軒ほどあったといわれるが、十八世紀後半になると文化の中心は京都・大阪から東京に移っていった。

江戸時代を中心とした大衆文学の発達、さし絵に用いる版画技術の発展を促進するところとなり、やがて極彩色の多色刷りの浮世絵版画が創始された。

(5)

書協 (特 集 号)

1992年(平成4年)5月1日

江戸時代における教育

ところで江戸時代における教育の状況の方はどうであったかという点と、とくに十八世紀末以降、多くの藩で城下町に「藩学」というバブリック・スクールが武士の子弟のために設けられ、城下町以外の地方にも武士や庶民の子弟のための「郷学」――ローカル・スクールが設けられるようになった。また民間においては「寺子屋」――プライベート・スクールが、寺院、僧侶、神主、村役人などにより盛んに設立されるようになり、庶民の子弟にヨミ・カキ・ソロバンなど基礎的教育が行われた。当時は書店の二階に寺子屋が設けられ、一階では出版、二階は教室で子供達が机を並べて学んでいるという光景もよく見られたのである。

このような「寺子屋」などによる民衆への教育の普及が江戸時代後期における出版業を盛んにした有力な要因であった。同時にまた出版が娯楽としてだけでなく、「寺子屋」などの教材となる書物を出版したり、人々に知識や道徳を伝えたり、ときには教育施設以上に庶民の啓蒙、知識獲得に教育効果を発揮したこともあったのである。

一八六八年の明治維新以後、江戸時代におけるこのような基盤に立つて近代的な学校制度が本格的に確立し整備されるとともに、出版も企業として急速に成長し、いわば教育と出版のパートナーシップが日本の近代化の一層のブッシュ要因となつて行った。

江戸時代の出版

しかしながら江戸時代の出版には日本出版文化史の研究者らによると、現在では想像もつかぬような多くの苦勞があつたことが伝えられている。草稿を起こしてから版木を彫り、印刷製本、そして奉行所の発売許可をとるまで五、六年、あるいは十年近くもかかった例もあるという。

そしてやっと発売にまでこぎつけた出版社はまずでき上った新刊書を神前にそなえ、前途の売れ行きを祈ったのである。一千部売れば当時は大変なベストセラーであつた。またある著者が、日本からヨーロッパまで世界はすつと海でつながっているのだから、これからは日本は海防を重視すべしという社会への警告の啓蒙書の原稿を折角完成したが、出

版の引き受け手がなく、止むなく自費出版という形で有り金をはたいて三年がかりで完成した。ところが三十部余り製本したところで、当局により内容が社会を不安にし不穏当ということで絶版、版木没収となり、「親もなく、妻もなく、子もなく、版木なし。金もなければ死にたくもなし」と嘆いたという有名なエピソードがある。当時の出版者はすでに一種の強烈な文化的使命感を持って頑張っていた様子がありありと伺われるのである。

江戸時代末期における日本の出版状況の中で、一つの特色として挙げなければならぬのは、幕府や諸大名が出版事業の振興に非常に積極的であつたということである。

幕府直轄の学問所においてはもとより、幕府の奨励により各藩や藩校において、学術書や教科書などが競って盛んに出版されるようになり、当時の日本の出版事業の拡大をブッシュする大きな力となった。

蘭学と出版

ところで江戸時代は、キリシタン禁制ということで鎖国下にあつたために、先進西欧諸国との交流は禁止

され、オランダのみがその例外として長崎を通して唯一の交易を認められていた。その狭いチャネルにより、ヨーロッパの学問が輸入され、日本の科学発展の基礎となった。そういう訳で当時ヨーロッパの先進科学を学ぶことは、「蘭学(Dutch Learning)」と呼ばれていたのである。

蘭学の一環として、一七七四年にはドイツ人医師の書いた解剖書のオランダ語訳「ターヘル・アナトミア」が日本の医学者等によって、血のにじむような四年がかりの努力によって日本語に訳述され、「解体新書」として完成された。これは日本における初めての本格的な翻訳書であつた。さらにわが国最初の蘭日辞書「ハルマ和解」が数年がかりで編纂され、一七七九年に出版されている。



開会式会場での植木氏(右端)

1992年(平成4年)5月1日

書協(特集号)

(6)

日本の出版業の発展は 内発的努力の積み重ね

やがて江戸時代が終わり、一八六八年、明治の開国を迎えたが、明治維新政府も江戸幕府と同様に出版奨励方針を引き継ぎ、例えば文部省内に編集局や翻訳局を設け、自ら多くの学術書や啓蒙書の翻訳出版を行うなどしたのである。そして民間出版業者が成長し、定着すると、政府は次第に官営の出版事業を民間に移譲して行った。このような政府のイニシアティブと政府による民間出版事業の奨励策が日本の近代化過程で民間出版業の発展に大変大きく貢献したと考えられている。一国の近代化が成功するためには、その国で内発的に発展した能力の存在が重要な役割を果たすものといわれている。これまで述べてきたように、江戸時代以来の日本の出版業の発展は、まさに内発的な努力の積み重ねによってもたらされたものである。

さる一九八七年、ACCU(ユネスコ・アジア文化センター)主催、ユネスコ、日本書籍出版協会などの協力で東京で開催されたアジア・太平洋地域の「図書開発計画専門家会

議」においてバブアニューギニアの代表がレポートの中で次のように述べている。すなわち、「出版業が海外からの借りもの、押しつけ的なものであつてはならないことは多くの国で証明されてきた。その国の文化の発展に寄与する本の製作、教育制度への対応、知識人と一般人の間の格差縮小、ニーズや状況の変化に対応したスピーディでフレキシブルな本の入手方法の確立を行うのは、まさにその国自身の思想家、作家、編集者、デザイナー、アーティスト、印刷業者でなければならない。」

以上、日本の近代化の過程における出版の歴史を見てきたわけであるが、国内における教育普及への努力が読書人口を増やし、出版事業の拡大をもたらしこととなったことがわかる。しかし同時に教育と出版は互いに補強し合い、互いに良い影響を与え合つて発展して行つたということを見落してはならない。

今日、出版の国際交流や国際協力が極めて重要であることはいままでもないことである。しかしその際、それぞれの国自身における出版が育成され、発展することを奨励する方向で行われることが必要であると私は考える。

今日の日本と

「文化化」という言葉

明治維新の開国以来今日まで、百二十数年が過ぎた。この間、政治・経済・社会・文化のあらゆる分野で、近代化のための大変な国民的努力が続けられたのである。その結果、日本は高度の近代化、産業化を達成するに至つた。

そして今日、日本は「国際化」、「情報化」、「高齢化」などの社会の変化や「環境の保全」のグローバルな課題に直面しつつある。

私はこれらに加えて、日本は今、「文化化」とでもいうべき社会の潮流の変化に直面しているとあえて言いたい。「文化化」という言葉は、日本でも未だ熟して使われているものではないし、英語にも適当な言葉が見当たらないが、あえて一言で「Culturalization」という造語を使いたいのである。要するに社会のあらゆる分野で、改めて文化を大切にして行こう、文化的側面を重視して行こう、物だけでなく心の豊かさを改めて大切にして行こうという、社会全体における強い文化志向の傾向を指すものである。

日本において、これからは「文化の時代」ということが盛んにいわれるようになったのは、一九七〇年代の終わり頃からである。一九七九年、時の大平正芳総理大臣が国会での施政方針演説の中で、今や日本は「経済中心の時代から、文化重視の時代に至つたもの」とみるべきである」と、「文化の時代」の到来を宣明したのがそのきっかけとなった。

日本は明治維新以来近代化に国民がたゆまぬ努力をし、その結果、自由とくに経済的な豊かさを享受している。しかしながら自然と人間との調和、精神の内面に根ざした生きがいなどに必ずしも十分な配慮がなされてきたとはいえないと、大平氏の文明的視点が披れきされたのである。日本のウィスキー会社として有名なサントリー株式会社が、経営の基本的理念として、人々に心のゆとりを提供する企業でありたいと「生活文化企業」を宣言したのも同じ一九七九年のことである。



マリカ・サラバイのインド民族舞踊

(7)

書協 (特 集 号)

1992年(平成4年)5月1日

物の豊かさ重視から 心の豊かさ重視へ

地方自治体において、文化行政それ自体の振興とともに、行政の各分野においてその文化的要素や側面を重視して行こうと、「行政の文化化」というスローガンが掲げられ始めたのは、それより少し前の一九七五年頃であった。一九七七年には政府の文化行政機関である文化庁から「文化行政長期総合計画について」という提言が出されている。各地域における地方自治体による文化振興事業が盛んになり、美術館や文化会館など各種の文化施設も急増した。

このような「文化化」の波は日本政府の総理府が毎年実施している「国民生活に関する世論調査」の中の「物の豊かさを重視するか」、「心の豊かさを重視するか」という項目の結果にも明瞭に現れている。一九七五年までは「物の豊かさを重視」の人々の割合が、「心の豊かさを重視」の人々の割合を上回っていたが、一九七六―七八年の間は両者がそれぞれ約四十%で伯仲している。大平総理大臣が国会で「文化の時代」を宣明した同じ一九七九年からは「心の

豊かさ重視」の人々の方が「物の豊かさ重視」の人々の割合を上回り始め、その傾向は年々拡大され、一九九一年現在では「心の豊かさ重視」の人々の割合が五十二・〇%と上昇し、これに対し「物の豊かさ重視」の人々の割合が三十三・五%と下がってきているのである。これは国民一人ひとりの意識の中で物の豊かさの重視から文化も大切だという方向へのシフトが次第に進みつつあることを示している。

われわれ人間は、生産 (production) 消費 (consumption) という経済の系列の中では「生産者」であり、同時に「消費者」である。一口でいえば「経済人 (homo oeconomicus)」なのである。しかし社会の文化志向が高まるにつれて、創造 (creation) — 享受 (enjoyment) という文化の系列の中の「創造者」と「享受者」として、つまり「文化人 (homo culturicus)」としての性格も表に出てくるようになってきているのである。

フィランソロピーと メセナ

一九八〇年代後半からは、日本ではとくに、一般の企業による文化事

業への進出や、また企業による文化支援の拡大など企業の「文化化」への傾向が目立ち始めている。出版、新聞、放送、映画などいわゆる文化産業はもとより文化を事業の対象としているが、そうでない一般の企業も、社会の磁場が文化志向に動いたことに敏感に反応して文化に熱い目を向けるようになってきたのである。

そして企業の社会的貢献やフィランソロピー、企業市民性が大きな話題となり、芸術文化支援を意味するメセナ (mecenat) というフランス語が新聞や雑誌にもしきりに使われるようになった。一九九〇年には政府出資五百億、民間企業百億の官民協力による「芸術文化振興基金」が創設されるとともに、メセナに関心の強



タージ・マハル全景

い企業、百数十社による「企業メセナ協議会」が設立され、さらに企業などの利益の1%を社会への貢献に使おうという経団連の「1%クラブ」もスタートしたのである。一九九〇年はまさに芸術文化支援への大きな動きが起きた年であった。

文化と経済は車の両輪 のようなもの

かつて文化は社会の「上部構造」、経済・生産は社会の「下部構造」であり、上部構造である文化は下部構造である経済や生産に規定され、文化は経済や生産の反映に過ぎないといわれたこともある。しかし日本の江戸時代や明治維新における近代化の過程をみても、それから近年の企業の「文化化」を含む日本の社会全体の文化志向の傾向をみても、文化の動きが経済に影響し、文化もまた経済を引っ張る力があることを示している。文化と経済の関係は、上と下という関係としてよりも、互いに影響し合う異なった者同士の横の関係として捉えた方がよいのではないだろうか。今や経済も文化をよけては前進できないし、文化もまた経済の強力な支援を必要とする時代であ

1992年(平成4年)5月1日

書協 (特集号)

(8)

る。経済なしでは一日も生きてはいけないし、文化なしには生きていく意味はない。社会にとって、文化と経済は車の両輪のような大切なものである。そのようなコンテクストにおいて、一九八八年から国連とユネスコのイニシアティブにより「世界文化発展の十年 (the World Decade for Cultural Development)」が始まり、

(1) To acknowledge the cultural dimension of development (開発における文化的側面を確認する)

(2) To affirm and enrich cultural identities (文化的アイデンティティを確認し、豊かにする)

(3) To broaden participation in cultural life (文化生活への参加を拡大する)

(4) To promote international cultural cooperation (国際文化協力を促進する)

の四つの主要目的が掲げられたのは、まことに時宜を得たことだと思う。社会の発展を進めて行く場合に、経済成長の必要性和文化の発展・保護についてどのようなバランスをとっていくかが大きな課題だと思う。かつては発展途上国の多くの開発計画の中に、文化的要素が充分に取り

入れられてなかったために、計画がうまく行かなかった例がみられたが、先進国、発展途上国ともに社会発展の中に人間的、文化的要素の側面が経済的、技術要素の側面とともにバランスよく位置付ける必要があるということである。文明の発展は物質的、量的成長のみでは限界があるということである。

文化的視点から触れた 日本の出版界の状況

ところで、日本は今、いわば私流に表現した「文化化」のほか、先程も触れたように、「情報化」、「国際化」、「高齢化」などの新しい社会的な変化に直面しているが、その中で日本の出版界の状況はどのような方向に動いているのだろうか。これを短時間で正確に言うことは難しいが、いくつかの当面の傾向について主として文化的な視点から触れてみたい。「文化化」現象により社会全体の文化志向が高まっていることは、いいかえれば、一人ひとりの個性化が強まり、読者一人ひとりの価値観の多様化が急速に進んでいるということである。書籍や雑誌も年々着実に増加しつつあるが、その中で、多品種

少量・生産の傾向が強まりつつある。現在の出版部数総数をみると、一九九〇年現在、書籍四十三%、雑誌五十五%、ニューメディア商品二%というシェアになっている。そして雑誌の細分化現象が生じているとともに、出版社は新刊雑誌の創刊を競っており、同時に廃刊になるものも多く、目まぐるしい状況にある。

「文化化」の現象の特色の一つとして、感性的なものを重視する傾向が増大している。その影響で、活字メディアへの映像の渗透の傾向が進行しつつあり、コミック本が成長を続け、日本経済入門やマルクスの資本論が漫画本になったり、膨大な日本歴史が全48巻の漫画本になったりさえしている。雑誌の色彩化、視覚化も進んでいる。一方、平均寿命がのびて人口構成の「高齢化」現象が進んでいるが、そのような状況の中で最近、中高年齢層の読者を対象にした雑誌が創刊され始めたのも注目すべきことであろう。また近年の傾向として地球環境問題に関する出版も増加しつつあるとともに一般企業による出版も増える方向にある。新しい電子テクノロジーの開発と「情報化」の進展に伴い、出版界におけるCDブック、CD-ROMなど電子

出版への関心も急増している。辞書などもすでにCD-ROM版で出版され始めている。

またとくに近年、フォトリコピーなど複写の技術開発による出版物からのコピーの急増は、出版社の経済的基礎に大きな影響を与えつつある。そのため、一九九〇年には文化庁の著作権審議会から、出版者の複写利用権に対する報酬請求権を認めることが適当であるとの報告書が提出されている。このような問題に対応するため、関係者により昨年九月「日本複写権センター」が設立されたところである。

日本における

国際協力と国際交流

今や「国際化」の時代を迎え、日本の出版界の国際交流、国際協力など、国際活動は年々活発になっている。とくにご承知の通り、一九九〇年十月のフランクフルトのブックフェアは「Japan: Then and Now」のテーマで開催され、日本書籍出版協会、日本雑誌協会が中心となり日本側からも協力を惜しまなかった。これらの国際活動における努力は、日本と世界の出版人の交流を促進して

いる。

アジア地域における文化や教育の分野における国際協力も大変積極的に行われている。文化の分野では「世界文化発展の十年」について、昨年十二月インドネシアにおいてアジア・太平洋地域の各国の代表が集まり、フォローアップのための会議が開催されたところである。

識字については、すでにタイのシ
 ヨムチェンで一九九〇年三月に「す
 べての人のための世界教育会議」が
 国際識字年の一環として開催され
 たところであり、多くの国で国際識
 字年のフォローアップ事業が行われ
 ている。

昨年二十周年を迎えたACCU（ユネスコ・アジア文化センター）は識字資料の開発のため、一九七〇年以来、地域内各国とユネスコの協力により、ACP（アジア・太平洋共同出版事業）を児童向け図書共同開発を目的に実施しているが、すでに「アジアの民話」「アジアの祭り」「アジアの子供の遊び」「アジアの不思議」など二十三タイトルが、各国の言葉（約四十カ国語）で刊行されすでに三百五十万部配布されているこれに加え、現在、「子供のためのエコロジー」の共同出版計画が進めら

れているが、これらはアジア・太平洋地域の識字、読書習慣の促進、出版開発に大変大きな刺激と効果をあげている。また年々東京で開催されているACCUの図書制作関係人材研修コースも、アジア・太平洋地域の識字、教育普及、図書開発に寄与しているところである。

講談社の元社長故野間省一氏を記念した、識字運動への貢献者に贈られるユネスコの「野間識字賞」が、昨一九九一年はインドの西ベンガル州政府の目覚ましい活動の功績に対し与えられたことは、なによりも嬉しいことである。

以上、私は日本を中心に出版や文化の発展について、文化と経済の関係について、そして国際協力についていくつかのポイントに触れてきたところである。

社会的創造への道を

照らす燈り

今日、世界のそれぞれの国々が文化と経済の共存・共栄の新しい道を求めつつあるとき、インドの長い歴史と多様な文化と言語やその偉大な哲学的伝統が文化と経済の均衡のとれた社会創造への道を照らす燈りと

国際出版連合第二十四回大会

参加国および参加者数

インドネシア	3	ポルトガル	12	* 同伴者等は除く	1
インド	51	ボイランド	1	W I P O	1
ハンガリー	1	フィリピン	8	G A T T	1
ドイツ	24	バキスタン	2	U N E S C O	2
フランス	13	ノルウェー	16	◆ 国 際 機 関	
フィンランド	7	ナイジェリア	3	ザンビア	1
デンマーク	8	オランダ	29	米 国	31
チェコスロバキア	1	メキシコ	2	英 国	24
コロンビア	1	モリシヤス	1	旧ソ連	12
中国	3	マレーシア	7	タンザニア	2
カナダ	4	マカオ	1	シリア	1
ブラジル	1	ルクセンブルグ	1	スイス	3
ベルギー	3	韓 国	12	スウェーデン	16
バングラデシュ	3	ケニア	1	スリランカ	2
オーストラリア	1	日 本	34	スペイン	25
アルゼンチン	1名	イタリア	9	シンガポール	2

なるであらう。

すてに述べてきたように、出版は文化と経済の二つの側面を持っており、ここにお集まりの出版者の皆様方は、まさに文化と経済の均衡を求めて毎日努力されてきているわけである。

最後にIPA大会の成功を祈りつつ、私の話を終わりたいと思う。



ろうそくの点燈と開会の儀式